

日蓮大聖人御書全集

もうこのつかいごしよ

蒙古使御書

新版
1946
ゝ
1948

もうこのつかいごしよ

蒙古使御書

けんじがんねん

がつ

さい

にしやまどの

建治元年('75)

9月

54歳

西山殿

かまくら

ことゆえ

おんくだ

よしうけたまわ

そうら

鎌倉より事故なく御下りの由 承り候いて、うれしさ

もう

申すばかりなし。

もうこ

ひと

くび

は

そうろう

うけたまわ

そうろう

にほん

また蒙古の人の頸を刎ねられ候こと 承り候。日本

こく

かたき

そうろうねんぶつ

しんごん

ぜん

りつとう

ほつし

き

国の敵にて 候 念仏・真言・禅・律等の法師は切られずし

とが

もうこ

つか

くび

は

そうら

て、科なき蒙古の使いの頸を刎ねられ候いけることこそ

ふびん

そうら

しさい

し

ひと

かんが

当

そうろう

不便に候え。子細を知らざる人は、勘えあてて候を、

傲

い

おも

にじゅうよねん

あいだ

わたくし

おごりて云うと思うべし。この二十余年の間、私には

ちゆうや でしとう なげ もう おおやけ たびたびもう
昼夜に弟子等に歎き申し、公には度々申せしこと、これ
なり。

いっさい だいじ なか くに ほろ だいいち だいじ そうろう
一切の大事の中に国の亡ぶるが第一の大事にて候なり。

さいしやうおうきよう い がい なか きわ おも こくい うしな
最勝王経に云わく「害の中の極めて重きは、国位を失う
す

に過ぎたるはなし」等云々。文の心は、一切の悪の中に、

こくおう な まつりごとあ わ くに たこく やぶ
国王と成つて 政 悪しくして我が国を他国に破らるるが

第一の悪にて候と説かれて候。また、金光明経に云わ

く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に乃至他方の

怨賊来つて、国人喪乱に遇わん」等云々。文の心は、国王

な あくにん あい ぜんにん とが 当

かなら くにたこく

と成つて悪人を愛し善人を科にあつれば、必ずその国他国

やぶ

もん

ほけきようだいご い

よ

くぎよう

に破らるるという文なり。法華經第五に云わく「世の恭敬す

ろくつう らかん

とううんぬん

るところとなること、六通の羅漢のごとくならん」等云々。

もん

こころ

ほけきよう

かたき

そうみよう

と

そうろう

文の心は、法華經の敵の相貌を説いて候に、

にひやくごじっかい

かた

たも

かしよう

しやりほつ

ひと

二百五十戒を堅く持ち、迦葉・舍利弗のごとくなる人を、

こくしゆ

たつと

ほけきよう

ぎようじや

うしな

国主これを尊んで、法華經の行者を失わんとするなりと

と

そうろう

説かれて候ぞ。

そ

だいじ

ほうもん

もう

べつ

そうら

とき

あ

わ

夫れ、大事の法門と申すは別に候わず。時に当たつて、我

くに

だいじ

すこ

かんが

違

がため国のため大事なることを少しも勘えたがえざるが、

ちしや

そうろう

ほとけ

もう

かこ

じかんが

智者にては候なり。仏のいみじきと申すは、過去を勘え、

みらい

知

さんぜ

し

す

そうろうおんちえ

未来をしり、三世を知ろしめすに過ぎて候御智慧はなし。

ほとけ

りゆうじゆ

てんじん

てんだい

でんぎよう

たとい仏にあらねども、竜樹・天親・天台・伝教など

もう

しょうにん

けんじんとう

ほとけほど

さんぜ

申せし聖人・賢人等は、仏程こそなかりしかども、三世の

し

そうら

な

みらい

なが

ことをほぼ知ろしめされて候いしかば、名をも未来まで流

そうら

されて候いき。

せん

ばんぼう

こしん

おさ

いちじん

欠

くせん

詮ずるところ、万法は己心に収まつて一塵もかけず、九山

はっかい

わ

み

そな

にちがつ

しゆしょう

こしん

八海も我が身に備わつて日月・衆星も己心にあり。しかり

もうもく

もの

かがみ

かげ

う

み

えいじ

といえども、盲目の者の鏡に影を浮かべるに見えず、嬰兒の

すいか おそ

げてん げどう ないてん しようじよう

水火を怖れざるがごとし。外典の外道、内典の小乗・

ごんだいじようとう

みな こしん ほう かたはしかたはしと そうろう

権大乘等は、皆、己心の法を片端片端説いて候なり。し

ほけきよう

と

きようぎよう

かりといえども、法華經のごとく説かず。しかれば、經々

しょうれつ

ひとびと

しょうけんわ

そうろう

ほうもん た た

に勝劣あり、人々にも聖賢分かれて候ぞ。法門多々な

とど

そうら

お

れば、止め候い畢わんぬ。

かまくら

おんくだ

恩

々

おんひま

ししやもう

鎌倉より御下りそうそうの御隙に、使者申すばかりなし。

うえ

しゅじゅ

ものおく

た

そうろう

よろこ

い

そうろう

その上、種々の物送り給ひ候こと、悦び入つて候。

にほん

みなひと

なげ

そうろう

にちれん

いちるい

なげ

なか

よろこ

日本は皆人の歎き候に、日蓮が一類こそ歎きの中に悦

そうら

くに

そうら

もうこ

せ

のが

そうら

び候え。国に候えば、蒙古の責めはよも脱れ候わじ。な

れども、くに 国のために責められ候いしことは、せ 天も知ろしめ

そうら

ごしよう

かなら

助

よろこ

そうらう

して候えば、後生は必ずたすかりなんと悦び候に、

ごへん

こんじよう

もうここく

おん

こうむ

たま

そうら

御辺こそ今生に蒙古国の恩を蒙らせ給いて候え。このこ

お

さいみようじどの

じゅうさんねん

あ

たま

おん

と起こらずば、最明寺殿の十三年に当たらせ給いては、御

狩

しよりよう

もう

ほうじようろくろいうどの

かりは所領にては申すばかりなし、北条六郎殿のように

つくし

おわ

おのおの

みこころ

たま

筑紫にや御坐しましたん。これは各々の御心のさからせ給

そうらう

ひと

とが 当

ひと

いて候なり。人の科をあつるにはあらず。また一つには

ほけきよう

おんゆえ

助

たま

そうら

法華経の御故にたすからせ給いて候いぬるか。ゆゆしき

おんひがごと

ほど

おんよろこ

参

よろこ

御僻事なり。これ程の御悦び、まいりても悦びまいらせ

そうら

たく候えども、

ひとき

人間きつつましく候いて、

慎

そうら

止

そうら

お

とどめ候い畢

わんぬ。

ないじ

乃時

にちれん

日蓮

かおう

花押

にしやまどのごへんじ

西山殿御返事